

二つの実在論

——「世界観」の観点からの分析——

山田貴裕*

1. 導入

本稿の問いは、形而上学的実在論（所謂実在論そのもの）と意味論的実在論、形而上学的反実在論と意味論的実在論の関係とはどのようなものか、というものである。一般に、X について議論する場合、X についての形而上学的実在論とは、その X 達は存在し、かつそれらは我々の認知活動から独立だ、という見解である。他方反実在論とは、それに対立する見解、即ちその X 達なるものはそもそも存在していない、或いは我々の認知活動に依存して存在している、とする見解を言う。そして X についての意味論的実在論とは、ここでは、X について述べている文については二値原理が成立するという見解であり、反実在論とは、二値原理が成立しない、とする見解としておく。

現在、形而上学的実在論・反実在論と見做せる立場が多数提起され、議論されている。例えば、存在するのは現在のものだけだ、とする現在主義は（現在以外の存在を否定するという意味で）一種の形而上学的反実在論に分類されよう。しかし、そうした立場が論じられる際、意味論的実在論・反実在論が検討されることは滅多にない。そしてその逆もそうである。実際、意味論的実在論・反実在論を提出したダメット Dummett は形而上学的実在論・反実在論がそのままの形で理解可能であるとは見做さなかったし（cf. 第 2.3 節）、何人かの論者は実在論論争は意味の問題ではないと述べる（cf. Devitt (1991, pp.3-4); Parsons (2005, p.161)）。本稿は、双方の立場が共に理解可能であるということを前提とした上で、このような状況に対する見通しを得ることを試みる。

本稿はミラー (Miller, 2003, 2006) の見解に対する検討と批判の形を取る。彼は形而上学的実在論と意味論的実在論の関係を、「世界観」と彼が呼ぶ観点から描写している。詳しくは後述するが、ここで言う世界観とは、形而上学・認識論・意味論の組のことである。私の見る所、彼の説明は十分ではないが、洗練させれば確かに役立つ視点となり得る。

以下ではまず、形而上学的実在論と意味論的実在論の関係に対するミラーの説明を見る（第 2 節）。次いで、彼のアイデアの不備を指摘し、洗練を加えることで形而上学的実在論・反実在論、意味論的実在論・反実在論の関係に対するよりよい見方を提案する（第 3 節）。

2. 形而上学的实在論と意味論的实在論の関係に対するミラーの見解

ミラーは、形而上学的实在論と意味論的实在論の関係を、「世界観」という観念を導入しつつ説明している。本節では、まずミラーによる形而上学的实在論・意味論的实在論の特徴付けを確認する(1,2)。次いでダメット自身による形而上学的实在論と意味論的实在論の関係に対する説明を見て(3)、それに対するミラーの態度を確認する(4)。最後に「世界観」なる観念を登場させ、ミラーによる二つの实在論の関係をみる(5)。

2.1 形而上学的实在論

ミラーは、デヴィット (Devitt, 1991) による「常識实在論」を僅かに修正しつつ提示し、それを外界についての形而上学的实在論の「厳格な形而上学的特徴付け」と呼ぶ。私の見る所、この命名によってミラーは、この特徴付けには言語論的な含みがない、ということを示唆している。即ちここには、外界の対象についての文の意味をどのように把握するのか、という観点が全く用いられていない。

常識实在論：その時々から見て、観察可能で、常識的で、科学的・物理的なタイプのトークンの殆どは、心的なものから独立して客観的に存在している。そしてそれらの有する性質には、人間の意識が全く気付かないかも知れないものがあり、そうしたものの最も内部の法則論的な秘密は、我々には永遠に隠されたままであるかも知れない。(Miller, 2003, p.193)

ここでは、「その時々から見て」と、常識实在論はその時点での常識・科学に相対的に定義されている。また、「タイプ」・「トークン」という表現は簡便の為であり、特にタイプの存在にコミットしているわけではない。「石は存在する」、「木は存在する」……というリストを挙げる代わりに用いているのだとされる。(Devitt, 1991, pp.19-21)

また、ミラーはこの外界についての形而上学的实在論と似た仕方、過去についての形而上学的实在論も定式化している。

過去についての常識实在論：その時々から見て、観察可能で、常識的で、科学的・物理的な幾つかのタイプのトークンは、心的なものから独立して、十億年前にも客観的に存在していた。そして、それらの所有する性質には、人間の意識がその所有の事実に関心なく気付かないかも知れないものがあり、そうしたものの最も内部の法則論的な秘密は、我々には永遠に隠されたままであるかも知れない。(Miller, 2003, p.211)

2.2 意味論的実在論

ミラーは、意味論的実在論を「決定可能性 decidability」の観念を用いて定式化している。ミラーはこの観念を、ダメットの記述 (Dummett, 1959, pp.16-7) から抽出し、次のように特徴付ける (cf. Miller (2003, pp.194). 但し私が整形した)。

当該の文が決定可能である iff (a) 我々はそれを真だとする証拠が偽だとする証拠を有しているか、或いは (b) (適切に実行されれば) 有限ステップののちにはそれが真か偽であるという証拠を手にする事の出来る立場に我々を置いてくれることが保証されているような手続を、我々が知っている。

彼は、これには更なる明確化が求められるだろうとしつつも、二つの実在論の関係を考察する上では必要ないとして、それ以上の考察を差し控えている (Miller, 2003, p.194; n.5)。

ミラーは、決定可能 / 不可能な文の例として次のようなものを挙げる。「あのレモンは渋い」は決定可能だ。なぜなら、まだそのレモンを味わったことがないとしても、その味を知る為の手段 (即ち、食べるということ) を我々が知っているからである。「宇宙の他の場所にも知的生命体がいる」は決定可能でない。というのも、我々にはそれを肯定する証拠も否定する証拠もないし、我々は肯定すべきか否定すべきかを判定する手続も知らないからである (Miller, 2003, p.195; 2006, p.985)。

これを踏まえ、ミラーは外界についての意味論的実在論を次のように定式化する。

外界についての意味論的実在論：外界についての決定可能でない文の理解は、その文の [潜在的に証拠超越的な 引用者] 真理条件の把握に存する。(Miller, 2003, p.195)

たしかに、「宇宙の他の場所にも知的生命体がいる」という文の真偽は実際には判定できない。しかし、実在論を採る者にとってはその真理条件 (地球に加え、それ以外のどこかにも知的生命体がいるということ) は把握することが出来、そのことによってこの文の理解は成立する、というわけである。

また、ミラーは明白には書いていないが、過去についての意味論的実在論もこれと同様に定式化することが出来よう。

過去についての意味論的実在論：過去についての決定可能でない文の理解は、その文の潜在的に証拠超越的な真理条件の把握に存する。(cf. *ibid.*, p.211)

そして、この立場は過去についての少なくとも幾つかの文の理解はその文の潜在的に証拠超越的な真理条件の把握に存する、と考える立場となる (cf. *ibid.*)。⁽¹⁾

ここで、彼の論述は、文字通り解釈するなら意味論的実在論の成立に対して決定可能でない文の存在を要求している、ということを描きおきたい。ミラーは、上の外界についての実在論の定式化に続き、次のように言う。

そういう場合、問題となる文の真理条件は、潜在的に証拠超越的なものとなる。我々は、適切に適用すれば [その文の為の] 証拠をどうにか導いてくれることが保証されている、という方法を知らないし、我々の知る限り、我々は証拠を決して見つけられないかも知れない。従って外界についての意味論的実在論は、外界についての少なくとも幾つかの文の理解は、その文の潜在的に証拠超越的な真理条件に対する我々の把握に存するという立場だということになる。(cf. *ibid.* 傍点原文、太字引用者)

他方、時折言及されるように、決定可能な文のみからなるクラスに於いては意味論的実在論と意味論的反実在論は有意味には対立しない (cf. Dummett (1959, p.24), Dummett (1963, p.155))。従ってミラーの論述の背景には、当該の領域に関して意味論的実在論が成立すると有意味に言われるとしたら、そのクラスには決定可能でない文が含まれているはずだ、という考えがあるものと思われる。この点については、第 3.1.1 節以降で再考する。

なお、こうした定式化の仕方は、勿論私が始めに述べておいた特徴付けと大きく異なるわけではない。というのも、文が決定可能でないにも拘わらず二値原理に従い真か偽であるというとき、その文の真理値は我々の有する証拠と無関係に決定されていることになるからである。但し、こちらでは、意味論的実在論は「意味の把握の仕方」を含むものになっている。これは、ミラーの枠組みに於いて、意味論的実在論が意味に対する見方を含んだものとして提示されることと調和的である (cf. 第 2.5 節)。

2.3 形而上学的実在論と意味論的実在論の関係：ダメットの見方

ダメット自身は、形而上学的実在論・反実在論の内容は意味論的実在論・反実在論の内容に尽きる、と考えている。形而上学的実在論・反実在論の内容は比喻によって語られがちだが、その比喻でない内容を明らかにしてみれば、それは意味論的実在論・反実在論に他ならない。(cf. Miller (2003, pp.196-7))

ダメットは次のように述べる。数学的実在論者は数学者を天文学者に喩え、反実在論者は彫刻家に喩える。これらはそれぞれの立場から数学者の有する自由を語ったも

のだ (cf. Dummett (1978, p.xxv), Dummett (1967, p.202))。また、物的対象はセンスデータからの論理的構成物だ、或いは過去や未来の出来事が在る(または無い)と言われることもある。しかしこれらはただの描像であり、字義的な内容は不明である。形而上学的議論を直接的に評価しようとするなら両陣営のテーゼをあたかも全くクリアであるかのように扱わねばならないが、それは非常に難しい (cf. Dummett (1991, p.10, p.12))。

しかし、彼は形而上学的実在論と反実在論が(その描像的な物言いから離れた)内容を有することを認める。というのも、形而上学的実在論の下では、文の真理値は当該の文が実在に沿っているか否かによって決まり、反実在論の下ではそうではない、と思われるからである。即ち、形而上学的実在論は二値原理を伴い、反実在論はこれを伴わない。(これは、私が始めに意味論的実在論・反実在論の内容とした特徴である。)そしてダメットはそこから更に進み、こうした相違は論理の上の相違を齎すと考える。なぜなら、二値原理は排中律を伴うからである。彼が形而上学的な実在論論争を解決する為に、どのような論証の形式が妥当であるかを考察しようとするのはそうした背景の故である (cf. *ibid.*, pp.9-12)。ダメットにとって、実在論論争に於いてこの意味と論理に関する争い以外に解かれるべき問題はないのである (cf. *ibid.*, pp.14-5)。

2.4 形而上学的実在論と意味論的実在論の関係：ダメットの見方への態度

こうしたダメットの見方に対するミラーの基本的な態度は、比喻で語られがちなのは数についての形而上学的実在論・反実在論であって、その他の領域に対しては比喻を使わずに述べる事が出来る、というものである。実際、上で見た常識実在論は比喻的ではない、と彼は見ている。(cf. Miller (2003, pp.198-9))

私の見る所、ミラーは、ダメットが形而上学的な実在論・反実在論の内容は理解しがたいとしている点に真向から反論しているわけではない。ミラーはダメットに対し、常識実在論の定式化のどの部分が比喻的であるかを指摘せよ、と挑戦する。ダメットには、この点に関する議論が欠けている。従って、形而上学的実在論・反実在論は一般には比喻的でないと想定して議論を進めてよいはずだ、というわけである (cf. Miller (2003, p.199))。私自身も全ての形而上学的実在論・反実在論が比喻的であるわけではないと想像するが、この点は機会を改めて論じることとし、ここではミラーの言い分を単に仮定しておく。

さて、ミラーはその上で、形而上学的実在論の内容は意味論的実在論に尽きるとするダメットの見解に対し、反論を提出している。即ち、次のような、外界についての或る種の形而上学的反実在論は、外界についての意味論的実在論と整合的だ、と言う⁽²⁾。

パークリーの観念論：普通の対象は、神がその心に於いて知覚するが故に存在する。

但し、私が見るにここで「神」は、我々にはその心にアクセスできないような者として想定されているのみであるから、代わりに次のような立場で考察してもよいはずである。

離れた場所の観念論：我々がアクセスすることの出来ない地点にいる人物が知覚する対象は、その人物がその心に於いて知覚するが故に存在する。(cf. Miller (2003, p.211))

この立場は対象の在り方を知的活動に依存させているから、形而上学的反実在論と呼ぶことが出来る。他方で、意味論的実在論は単に、離れた場所の対象に関する文の把握は潜在的に証拠超越的な真理条件の把握に存すると言うだけである。確かに、この二つは矛盾していると即座に言うことは出来まい。

2.5 「世界観」による形而上学的実在論と意味論的実在論の関係の説明

ミラーは、形而上学的実在論と意味論的実在論の関係を説明する為、「世界観」という観念を持ち出す。

実在論者が興味を抱いているのは、究極的には、実在論的世界観を擁護することである。世界観とは何か。一つの世界観は、少なくとも形而上学（何が在るのか、その本性は何か、についての一般的説明）、認識論（その形而上学に含まれている対象や性質の知識は、如何にして所有できるのか、についての説明）、意味論（その形而上学に含まれている対象や性質について、我々は如何にして語り、考えることが出来るのか、についての説明）から成る。尤もらしい世界観とは、構成要素のそれぞれがそれ自体で尤もらしく、構成要素同士が少なくとも両立可能であるような世界観である。尤もらしい実在論的世界観とは、常識実在論を形而上学的構成要素として有する尤もらしい世界観のことである。(Miller, 2003, p.206. 強調原文。 Miller (2006, pp.988-9) にも同様の文章が見える。)

彼が実在論的世界観の意味論的構成要素として挙げるのは、「意味と理解に対する真理条件的見方 Truth-Conditional Conception」(以下、単に TCC) である。これは、文が当

該の意味を有しているのは当該の真理条件を有しているからであり、言語使用者によるその文の意味の理解はその真理条件の理解に存する、とする見方である (cf. Miller (2003, pp.206-7))。

ミラーは、多くの形而上学的実在論は TCC と組み合わせた時、意味論的実在論を帰結する、と述べる (cf. Miller (2003, pp.209-210))。例えば常識実在論の場合、「宇宙の他の場所にも知的生命体がいる」という文の意味の把握が、潜在的に証拠超越的な真理条件の把握に存することになる⁽³⁾。そして、ダメットによる意味論的実在論批判は、常識実在論を形而上学的構成要素に据えた尤もらしい世界観を構成したければ、TCC を修正するか、或いは別の意味論的構成要素を提案しなければならない、という主張に相当する。こうして、ダメットの議論は間接的にでも意義を保持することになる (cf. Miller (2003, p.209))。これが、「世界観」の観点からの見方である。

3. 形而上学的実在論・反実在論と意味論的実在論・反実在論の関係のよりよい見方

本節では、ミラーの見方を批判し、よりよい見方を提案する。その為にまず、形而上学的反実在論と意味論的反実在論を定式化する。その上で、形而上学的実在論-意味論的実在論の関係と形而上学的反実在論-意味論的反実在論の関係が単純なものではないことを確認し、ミラーの説明が少なくとも不十分であることを示す。

ミラー自身は反実在論についてあまり述べていないが、彼の定式化の仕方に則れば、次のようになるだろう (なお、「離れた場所の観念論」も形而上学的反実在論の一つである)。

常識的对象についての形而上学的反実在論：その時々、観察可能で、常識的で、科学的・物理的なタイプのトークン及び、その有する性質の殆どは、存在していないか、或いは心的なものに依存して存在している。

過去についての形而上学的反実在論：その時々、観察可能で、常識的で、科学的・物理的なタイプのトークン及び、その有する性質の殆どは、存在していなかったか、或いは心的なものに依存して存在していた。

過去についての意味論的反実在論：過去時制文の理解はその文の為の証拠が、証拠を手に入れる為の手續の把握にのみ存する。

この意味論的反実在論の下では、過去時制文が真であるときには、その為の証拠があることになる。証拠が無いような文は真でも偽でもない⁽⁴⁾。

たしかにミラーは、「多くの」形而上学的実在論は TCC の下で意味論的実在論を導く、と制限を設けていた。これが同時に、その逆、即ち意味論的実在論を導く形而上学的構成要素の「多く」は形而上学的実在論だ、ということも主張しているとする、離れた場所の観念論がその例外となる。実際、離れた場所の観念論が意味論的実在論を導くということはミラーも認めている。我々は、離れた場所の対象が関わる全ての事実に関してアクセスを有しているわけではないから、そうした事実に関する文が理解できるとしたら、その理解は潜在的に証拠超越的な真理条件の把握に存することになるのである。(cf. Miller (2003, p.211))

では、二つの反実在論の関係は、一般にどのようなものと見ればよいだろうか。二つの実在論の関係に倣って「多くの」形而上学的反実在論は TCC の下で意味論的実在論を導く、とするのは適切とは思えない。なぜなら、形而上学的反実在論の典型たるパークリー的観念論（或いは離れた場所の観念論）がその例外となるからである。従って、少なくともミラーの見方は、二つの反実在論の関係に関し、即座に説明を与えてくれるものではない。

以下で、ミラーによる説明が一般的な見通しを与え得ない理由を明らかにした上で(1) 形而上学的実在論-意味論的実在論、及び形而上学的反実在論-意味論的実在論の関係のよりよい見方を提示したい(2)。

3.1 ミラーの不備

ミラーは、形而上学・意味論・認識論からなる「世界観」という枠組みを用いることで、形而上学的実在論-意味論的実在論の関係、引いては形而上学的反実在論-意味論的実在論の関係を明らかに出来る、と言いたいだろう。しかし、私の見る所、彼は個々の形而上学的実在論・反実在論と意味論的実在論・反実在論の関係を見る視点は与えたが、統一的な帰結を引き出すほどに十分な考察は行っていない。彼は少なくとも、二つの実在論・二つの反実在論を「世界観」の観点から説明する上で、次の二点を考察することを怠っている。即ち、認識論的構成要素、及び形而上学的構成要素としての「何が在るか」の二点である。

3.1.1 認識論的構成要素

その他の構成要素が一定であっても、認識論的構成要素が変更されるだけで、意味論的実在論が帰結するか否かは変化する。以下では、離れた場所についての観念論を例としてそれを示したい。

一方で、遠く離れた場所からの通信による情報は歴とした知識とは呼べない、という禁欲的な認識論を採用したとする。このとき、遠方に於いては知的活動を行う主体

によって存在者が存在させられているのだが、我々はこの人物から何の証拠も得ることが出来ない。従って、この遠方に於ける存在者に関する文の理解は、潜在的に証拠超越的な真理条件の把握に存することになる。そのため、意味論的实在論が帰結する。恐らく、これまで暗黙に想定されていたのはこのような認識論である。

他方、通信による情報をも歴とした知識と認める緩い認識論を採用し、また幸いにも遠方の主体が逐一全ての情報を寄せてくれるとする。このとき、我々はその人物の周りの状況に関して、十分な知識を得ることが出来る。すると、我々にとっては決定不可能な文が無い場合、意味論的实在論は有意義には成立しないことになる。

この二つ目の結果が齎されてしまう理由の一つは、意味論的实在論の成立に、当該の文のクラスが決定可能でない文を含むことが要求されているということである（cf. 第 2.2 節）。もちろん、決定可能な文のみからなるクラスに於いては意味論的实在論と意味論的反实在論が有意義には対立しないのだから、寧ろそのときそれらは両立する、と考えることも可能であろう。しかしその場合には、現在の状況設定は意味論的实在論論争が生じないという状況に相当する。即ち、離れた場所についての観念論と TCC を採ったとしても、認識論的構成要素次第で、实在論論争は無化するのである。

3.1.2 形而上学的構成要素としての何が在るか

ミラーは、「世界観」の形而上学的構成要素を「何が在るのか、その本性は何か、について的一般的説明」としながら、実際には常識实在論や、離れた場所の観念論といった、存在者の「存在性格」に関するテーゼしか念頭に置いていないように見える。これらは言わば、存在者の实在性に関するテーゼである。しかし私が見る所、これらが一定であっても、「何が在るか」、即ちどのような存在者が存在するとされているかに関する想定次第では、意味論的实在論が成立しないことがある。例えば、仮に特定の種類の存在者は我々の認知能力の及ぶ範囲にしか存在していない、と想定するとすれば、その種類の存在者についての意味論的实在論は有意義には成立しない。なぜなら、そうした存在者達についての文で決定不可能なものがないからである。（或いは、先程と同様に、そのときはそうしたクラスに於いて意味論的实在論と意味論的反实在論が両立することにすれば、「何が在るか」次第で实在論論争が無化するようになる。）

たしかにこの論点については、实在性に関するテーゼと「何が在るか」を厳密に区別できるか、という懸念がある。例えば、常識实在論は明白に、常識的に対象とされるものや、その有する性質の一部は（我々に知られずに）存在している、と述べている。従って、常識实在論は实在性に関するテーゼであると同時に、「何が在るか」でもあると言えるかも知れない。また、特定の種類の存在者が存在することを否定する

「何が在るか」は、同時に実在性に関するテーゼとして形而上学的反実在論に分類されるかも知れない。現在主義が形而上学的反実在論と見做されるのはこの特徴の故である。

しかし、「何が在るか」を殆ど備えていないにも拘わらず実在性に関するテーゼとして適格だ、というものもあるように思われる。その例が、離れた場所についての観念論である。これは、当該の離れた場所に存在するはずのものは何であれ、その場所の主体に依存して存在する、と述べる。即ち、存在者の存在性格を述べつつも、主体がどのようなものを存在させているのか、という点については沈黙するのである。

私が主張しているのは次の二点である。即ち、(i)「何が在るか」を含まない純粋に実在性にだけ関するテーゼがあり、それらには「何が在るか」を付け加えうる、という点と、(ii) 形而上学的構成要素としての「何が在るか」次第で意味論的実在論は成立しなくなることがある、という点である。実際、離れた場所についての観念論に、我々から見て遠方には知覚されるべき対象（知的活動を行う主体を含む）は全く無く、全ての存在者は我々の近隣に集まっている、という「何が在るか」を付け加えたテーゼは、それだけなら整合的であると思われる。このとき、離れた場所に在る存在者に関する文のクラスについては、意味論的実在論は成立しない。なぜなら、そうした文は全て、「何が在るか」の想定により、決定可能だからである。（遠方に何が在ることを告げる文は偽である。また、遠方に存在することが意図されている固有名を含む文の真理値は、「空名を含む言明をどのように扱うか」に関する意味論的考察に依存して判定されよう。）⁽⁵⁾

私の見る所、ミラー自身による「世界観」からの説明は単純すぎる。少なくとも、(i) 認識論的構成要素の重要性を考慮すること、そして(ii) 形而上学的構成要素として、実在性に関するテーゼの他に、「何が在るか」を勘案すること、この二点が必要であろう。

3.2 形而上学的反実在論と意味論的実在論の関係の適切な見方

こうしたことを踏まえれば、意味論的実在論及び意味論的実在論が成立する為の条件を、大雑把にでも一般的に述べる事が出来るように思う。但しここでは、意味論的実在論が成立する為には当該の文のクラスに決定可能でない文が含まれることが必要であるとしておく。⁽⁶⁾

意味論的実在論 が成立する if 決定可能でない文があることを認める

という意味で認識論が弱い、かつ、我々の認知能力の範囲外の存在者を認めるという意味で形而上学が強い。

意味論的反実在論 が成立する if 全ての文が決定可能であるという意味で認識論が強い、または、我々の認知能力の範囲内の存在者のみを認めるという意味で形而上学が弱い。

意味論的実在論と反実在論のどちらが成立するかは、実在性に関するテーゼ単独から直接的に決まる事柄ではない。しかし、無関係というわけでもない。それは、実在性に関するテーゼを含む「世界観」の他の構成要素がどのようなものであるかによって、決定される。これが、私が見る所の二つの反実在論・二つの実在論の関係である。(7)

4. 結語

本稿で私は、形而上学的実在論・反実在論と意味論的実在論・反実在論の関係を考察した。その為に、ミラーの「世界観」という観点からの説明を検討した。彼の見方は統一的な説明を行う上では不十分なものであったため、私は手直しを加えた。私の結論は、形而上学的実在論・反実在論はそれだけで意味論的実在論・反実在論に結び付くわけではなく、合わせて採る認識論や他の形而上学的立場次第で、いずれを帰結するかが決まる、というものである。

但し、本稿がダメットの想定とは異なって、飽くまでも形而上学的実在論・反実在論をそのまま理解可能な立場として前提している（「厳格な形而上学的特徴付け」が理解可能だと想定している）ということ是指摘しておかねばならない。この論点については機会を改めて議論したい。

註

* g.yamadatakahiro@gmail.com

(1) 更にこれを一般化すれば、次のように「X についての意味論的実在論」を定式化できよう。

X についての意味論的実在論 : X についての決定可能でない文の理解は、その文の真理条件の把握に存する。

目下の想定では、この立場は「X についての少なくとも幾つかの文の理解は、その文の潜在的に証拠超越的な真理条件に対する我々の把握に存する」と考える立場である。

(2) cf. Berkeley (1998, p.105), Loar (1987, p.81), Miller (2003, p.200). ここでは Loar (1987) と Miller (2003) の記述に従うこととし、提示された見解が Berkeley (1998) にとって適切かどうかを問題にしない。

(3) なお、ミラーによればダメットもこの TCC を尤もらしいと認めているとされる。但し、このとき「真理」の概念が我々の認知能力によって制限されたものになる (cf. Miller (2003, p.208), Miller (2006, p.991)). 即ち、成立している場合には我々がそのことを確認できるよう

な条件のみが「真理条件」として許される、というわけである。意味論的構成要素の候補が TCC のみであるとしたら、たしかにこれを採り上げるメリットは薄い。しかし、ここではこれ以上追求しない。

(4) 同様に、「X についての意味論的反実在論」も定式化できよう。

X についての意味論的反実在論：X についての文の理解はその文の為の証拠か、証拠を手に入れる為の手續の把握にのみ存する。(従って、決定可能でない X についての文は理解できない。)

(5) もちろん、ここで私はこのような形而上学的立場が整合的である以上に尤もらしいと言うつもりはない。しかし、そのことが問題となるのは尤もらしい世界観を構成する場合のことである。

また、別の懸念、即ち、実在性に関するテーゼなしの純粋な「何が在るか」など理解不可能ではないか、という懸念もあるかも知れない。これには次のように答えよう。私にとっては (i) の代わりとして、次のようなより弱い主張でも十分である。即ち、(i') 実在性に関するテーゼと「何が在るか」を共に含む任意の形而上学的構成要素から、「何が在るか」だけを自由に交換して新しい形而上学的構成要素を形成することが出来る。

(6) また、意味論的構成要素の選択肢は TCC 以外にないとし、そこで採用する真理概念は認知能力によって制限されていないものとする。制限された真理概念を用いる場合には、他の構成要素如何に拘わらずに、意味論的反実在論が成立するように思われる。

(7) なお、ミラーは、実在論的世界観とは実在性に関するテーゼとして形而上学的実在論を有する世界観の名前だと言いたいのかも知れない (cf. Miller (2003, p.206), Miller (2006, p.988-9))。しかし、これには反対する理由がある。即ち、形而上学的実在論を採用しているか否かは世界観の一構成要素の問題に過ぎない一方で、意味論的実在論であるか否かは世界観全体の問題だ、ということである。従って、意味論的実在論を帰結する世界観こそ実在論的世界観の名にふさわしいとも思われる。しかし、これ以上ここでは名前の問題を議論しない。

文献

- Berkeley, G. (1998). *A Treatise Concerning the Principles of Human Knowledge*, Dancy, J. ed., Oxford: Oxford University Press.
- Devitt, M. (1991). *Realism and Truth*, 2nd edn., Princeton: Princeton University Press.
- Dummett, M. (1959). 'Truth,' in Dummett, M. (1978). *Truth and Other Enigmas* (pp.1-24), Cambridge: Harvard University Press.
- (1963). 'Realism,' in Dummett, M. (1978). *Truth and Other Enigmas* (pp.145-65), Cambridge: Harvard University Press.
- (1967). 'Platonism,' in Dummett, M. (1978). *Truth and Other Enigmas* (pp.202-14), Cambridge: Harvard University Press.
- (1978). *Truth and Other Enigmas*, Cambridge: Harvard University Press.
- (1991). *The Logical Basis of Metaphysics*, Cambridge: Harvard University Press.
- Loar, B. (1987). 'Truth beyond All Verification,' in Taylor, B. M. ed. *Michael Dummett: Contributions to Philosophy* (pp.81-116), Dordrecht: Martinus Nijhoff Publishers.
- Miller, A. (2003). 'The Significance of Semantic Realism,' *Synthese*, 136, 191-217.
- (2006). 'Realism and Antirealism,' in Lepore, E. & Smith, B. C. eds. (2006). *The Oxford Handbook of Philosophy of Language* (pp.983-1005), Oxford: Clarendon Press.
- Parsons, J. (2005). 'Truthmakers, the Past, and the Future,' in Beebe, H. & Dodd, J. eds. *Truthmakers: The Contemporary Debate* (pp.161-74), Oxford: Clarendon Press.

〔京都大学大学院博士課程・哲学 / 日本学術振興会特別研究員〕